

高館

高館は衣川と北見川を広範囲に、東稻山（別称：さくら山と東山）を東に見ることが出来る山の尾根です。日本で最も著名な侍である源義経の旧家屋、そして彼が命を絶った場所として知られています。1683年に遡る高館義経堂には平泉の生活において彼と一緒に暮らした兵士の像とともに義経がまつられる小さな神社があります。京都付近の鞍馬寺の僧と一緒に暮らした後の1160に起きた平治の乱の時に義経の父そして二人の兄は殺されました。1174年に義経の父の友人であった商人が義経を平泉に連れて行き、そこで義経は自治領の三代目君主藤原秀衡(1122?-1187)の保護下に置かれました。

義経は優れた武士に成長し、後の源平合戦(1180-1185)の勝利を導くまでとなった。彼の名声は彼の異母兄弟である源頼朝(1147-1199)の嫉妬と妬みを買うことになり、1185年に京都から逃げる必要に迫られました。彼は平泉に行き、また秀衡の庇護の下で生活する身となりました。しかし、秀衡の息子藤原泰衡(1155-1189)が頼朝の勢力に押されて、衣川の義経の住処を占拠するために自分の兵を派遣しました。後に衣川の戦いと知られるこの出来事は泰衡が伝説的力を持つ僧兵・齋藤武蔵坊弁慶(1155-1189)含む義経の支持者を破ったといわれます。義経は殺されるよりもまだとして自殺し自分の命を絶ちました。

義経の偉業は詩、能、歌舞伎などの日本文学だけでなく近代漫画、小説、テレビドラマでも尊ばれています。日本俳諧士の中でも最も著名だとされている松尾芭蕉(1644-1694)は義経を悼むために高館を訪れています。彼は現在の東京である江戸を1689年春に立ち、北日本を2年半以上かけて巡りました。彼は韻文と散文を交えた俳文調で紀行文である奥の細道を作成しました。彼は平泉に到着した時、秀衡の城が田畑になっているという事実を知りその町の失われた栄光に大変衝撃を受けました。高館では、芭蕉は衣が関の北にある泰衡の打ち破れた家に対して想いを馳せました。高館で彼はこのように残しています。

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鷄山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。

(中略)「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打敷て時のうつるまで涙を落し待りぬ。夏草や兵共が夢の跡